

日本語表現能力に関する実践的教育

—演習「プロゼミⅡ」の実態調査—

● 村 越 行 雄

平成19年度秋学期開講の演習「プロゼミⅡ」について、実態調査の報告を行い、それによって日本語表現能力の実践的教育の可能性を明らかにしていきたい。

最初に、授業の目的・目標について、簡単に説明してから始めることにする。演習「プロゼミⅡ」は、大学に入学したばかりの1年生対象の基礎的演習で、大学での勉強を有効に、しかも成功させ、最終的には無事に卒業できるまで継続できるようにするための基本的な能力を養い、発展させることに授業の目的・目標がある。今回は、大学生にとって必要な基本的な能力として、日本語運用能力、特に日本語表現能力の養成・発展に主目的を置いて進められた。そして、日本語表現能力の内、特に発表能力に対して焦点が当てられ

た。しかし、発表能力だけを単独で、他の能力と完全に切り離した形で訓練することは、不可能ではないが、効果的とは言えず、他の能力との関連の中で訓練することの方が有効かつ効果的であると考え、日本語の総合的な能力の訓練を実施することにした。つまり、資料を読むこと、文章の形でレポートを書くこと、多数の人の前で口頭で話すこと、他の人の発表を聞くこと、これら読む・書く・話す・聞くの4能力を総合的に訓練し、そしてその中で発表能力を伸ばすことを実践した。

演習「プロゼミⅡ」は、1セメスター開講の授業で、21名の学生が履修登録した。なお、登録者は、全員跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科の学生で、全員女性であった。

授業は、第1回目に、授業の性格付け、授業の目的・目標、授業のスケジュール、授業の進め方、学生各人の関わり方、成績評価、その他のことを説明した。学生各人が授業で何が行われるのかを事前に理解しておくことは、学生参加型で、訓練主体の授業では必要不可欠なものである。そのような事前の説明と理解が欠けていると、授業への関わり方が分からず、従って積極的に参加できず、結果的に興味を失い、やる気を無くし、訓練そのものが空回りし、成果を全く得られないことになってしまう。

スケジュール的に言えば、第2回目と第3回目の2回で、教員の方から講義形式で、テキストを使用しながら、レトリックの全般的で、概略的な説明を行うこと、第4回目以降は、学生主体の発表などを行うことなどを第1回目の時に説明した。

レトリックの全般的で、概略的な説明については、高校卒業から半年ぐらいしか経っていないため、大学での授業に余り慣れてお

らず、高校時代の授業のイメージでいることをまず自覚させ、高校とは異なる大学の授業を体験させること、また日本語表現能力の獲得・養成・発展のために、レトリックの知識は欠くことのできないものであること、更には学生の興味、性格、知的能力を出来れば把握できることを願ったことなどがあったので、実施した。従って、講義形式での授業と言っても、専門科目の授業とは異なり、学生の態度などを見ながら、授業中のいつでも質問できるような雰囲気を作り、時には教員から学生に質問などをして、双方向的な授業を行う必要があった。

レトリックについては、あくまでも訓練実施の前に、最低限必要なものに限定して授業を行う必要があり、古典レトリックから現代レトリックまでの歴史的な変化の過程とレトリックの一般的な特徴に限定して、簡単に、しかも学生に興味を抱かせる目的で、なるべく身の回りの具体例を多く入れながら説明した。訓練主体の演習では、余り多くの知識を教えること

は、逆効果になる危険性があるため、最小限の知識を教え、後はむしろ訓練の中で学生自ら考えて、工夫できるように配慮した。テキストを使用し、授業前に必ず読ませ、予備知識を持たせることで、理解度を高めることができた。しかし、残念ながら、テキストとして適切なものが見当たらず、一応テキストを指定して、使用したが、テキストに書かれていないことも多く入れて説明したので、指定テキストはあくまでも基礎的な知識を得るためのもので、参考程度に利用した。

第4回目以降の発表などについては、第1回目の授業の時に（第1回目だけでなく、第2回目と第3回目にも追加的な説明をした）、次のように説明した。

①学生は一人持ち時間10分で、壇上に上がって、発表する。なお、決められた時間内でまとめて、発表することも訓練になるので、10分以内での発表を守らせる。

②発表は、学籍番号順に毎回7名が行う。もし欠席者がいる

場合は、それ以前に欠席で、発表できなかった学生に発表させる。そして、全員合計3回の発表を行う。

③発表する資料は、発表前に自分で見つけ、発表準備をしておく。少なくとも、発表準備には、2週間はかかるので、その予定で早めに資料を探しておく。

④発表の資料は、全く自由で、何らの制限・制約はない。ただ、参考例として、余り値段の高くはない文庫本、雑誌、新聞などの安価なものでいいこと、また小説、論文、ノンフィクションから漫画、絵画集、写真集までの内容・形式は何でもいいことを伝える。ただ、漫画、絵画、写真などは、読みやすく、見やすいけれど、10分でまとめて、発表することは、むしろ難しくなることなどを伝える。

⑤発表の内容は、著書を例に挙げれば、最初に、著書名・著者名・出版社名、次に、あらすじ、更に、評価とコメントの順序で言う。

⑥発表前に、発表する内容(⑤に従って)に関するレポートを作成し、教員に提出する。なお、発表の際は、提出されたレポートをそのまま読んでも構わないし、また目の前にいる聴衆のことを考えて、何らかの工夫をして、レポートとは内容的にも、形式的にも、変更しても構わないことを伝える。特に、説得を主目的とする古典レトリックのことを引き合いに出して、ただ書かれたものを読むよりは、声の出し方、動作・しぐさ、その他の非言語的手段を使用して、聴衆を説得することが重要であることを言う。

⑦21名の授業の中で、1名が壇上で発表し、残りの20名が聴衆になる。聴衆全員が、発表者一人ひとりに対して、それぞれ別の紙にあらすじと評価・コメントを書く。それらの紙を発表者に渡し、次回の発表の参考にする。なお、適当に書かれたり、嫌がらせで書かれたり、その他の理由で、不当に書かれたりするのを避ける意味で、評価・コ

メントを書いた学生の名前を書かせる。従って、発表者は、誰が、どのような評価・コメントを書いたかが分かることになる。しかし、逆に、誰が書いたかが分かることで、批判などが書きにくくなることもあり得るので、公平性が訓練には必要であることを伝える。

⑧成績評価は、各発表学生に対して、教員側が5点満点で、発表前のレポートと発表の評価をし、学生側も5点満点で、口頭の発表を評価する。従って、各学生は、一回の発表で、教員の成績と学生の成績(聴衆の20名全員が5点満点で評価し、その平均値を出す)の合計をもらうことになり、最高10点から最低0点までとなる。それが3回分で、合計30点が最高になる。

以上が、基本的な成績評価の基準であるが、更に次のことも加える。聴衆の20名が書いた評価・コメント用紙を教員が集め、5点満点で評価し、その後各発表者に振り分けて、渡す。評価・コメント用紙の評価をす

るのは、不当な内容が書かれていないかを調べることができ、また5点法で評価することを知って、学生もよりよく記入するために、発表を真剣に、詳細に聞くことになることを期待してである。

⑨21名全員が発表終了後、第2回目、そして同様に第3回目の発表に入っていく。その都度、教員から全体的な評価・コメントを授業中に説明する。なお、各発表毎にも、その都度簡単な評価・コメントを行う。

⑩授業内での時間配分は、7名の発表者が10分の発表、聴衆が発表開始後直ぐに評価・コメント用紙に記入し始め、発表終了後余り時間をかけずに、次の発表者に移す。それに、各発表に対する教員からの簡単な評価・コメントの時間もある。それに加えて、用紙の配布、学生の移動など、いろいろと時間のかかることがある。従って、90分授業内で、7名の発表は簡単なことではない。その意味でも、事前の授業に関する理解は絶対

必要になる。

以上の手順と基準に基づいて、第4回目の授業から学生の発表を実施した。日程は、具体的には以下のようにした。なお、授業は、金曜日4時限目に行われた。

①10月5日 最初の授業：

授業に関するオリエンテーション、20名出席・1名欠席

②10月12日 レトリックに関する講義：レトリックの歴史と一般的特徴、19名出席・2名欠席

③10月19日 レトリックに関する講義：テキスト『大学生のためのレトリック入門』の第1章、2章、3章を中心に説明、20名出席・1名欠席

④10月26日 第1回目の学生発表：指名された7名の内、6名発表・1名欠席、19名出席・2名欠席

⑤11月9日 第1回目の学生発表：指名された7名の内、6名発表・1名欠席、18名出席・3名欠席

⑥11月16日 第1回目の学

生発表：指名された7名の
内、5名発表・2名欠席、
未発表者1名発表追加、合
計6名発表、18名出席・3
名欠席

⑦11月23日 勤労感謝の日

⑧11月30日 第2回目の学
生発表：指名された7名の
内、4名発表・3名欠席(準
備不足のための未発表者を
含む)、未発表者2名発表
追加、合計6名発表、20名
出席・1名欠席

⑨12月7日 第2回目の学
生発表：指名された7名の
内、5名発表・2名欠席(準
備不足のための未発表者を
含む)、19名出席・2名欠席

⑩12月14日 第2回目の学
生発表：指名された7名の
内、4名発表・3名欠席(準
備不足のための未発表者を
含む)、未発表者2名発表
追加、合計6名発表、18名
出席・3名欠席

⑪12月21日 第3回目の学
生発表：指名された7名の
内、6名発表・1名欠席、

16名出席・5名欠席

⑫12月25日 (金曜日の振
替授業日) 第3回目の学生
発表：指名された7名の
内、6名発表・1名欠席、
未発表者1名発表追加、合
計6名発表、12名出席・9
名欠席

⑬1月11日 体調不良の
ため、休講

⑭1月18日 第3回目の
学生発表：指名された7名
の内、7名発表、20名出席・
1名欠席

上記の数字で示されているよう
に、指名された学生の内、実際に
発表した学生数と欠席・未発表者
の学生数、授業中に発表した学生
数、授業への出席の学生数と欠席
の学生数を授業毎に挙げた。その
数字が持つ意味は、発表する学生
側だけでなく、聴衆として聞く学
生側も、相互に分担された役割が
あり、クラス全体の役割の相互関
係において、初めて効果が最大限
に発揮できると考えられるからで
ある。

授業開始前の企画・計画段階で

は、次のように考えた。受講生21名の内、1名が発表し、20名が聴衆になり、1授業毎に7名が発表し、それぞれ20名の聴衆を持つことになる。発表者は20名の聴衆の説得の仕方を工夫し、20名からの評価・コメント用紙を読むことで、フィードバックができ、聴衆は7名の発表を聞き、それぞれの7つの評価・コメントを書くことで、単によく聞き、よりよく理解するだけでなく、自分が発表する時に、それをフィードバックできることになる。発表者と聴衆は、互いの異なる役割を持ち、それを十分に果たし、次にそれをフィードバックすることで、相手側の役割の理解度を高めることができ、量的に多ければ、それだけ効果も上がる。

しかし、上記の数字が示すように、全員出席の授業は残念ながら1度もなく、1名から数名の欠席者がいた。その分だけ、発表者の数が減ったり、聴衆の評価・コメント用紙の数も減り、効果を下げる原因になった可能性はあった。また、1授業毎の発表者は、大体

6名であった。ただ、実際問題として、6名の発表の方が時間的に余裕ができ、7名で急がせるよりは良かったと思われる。そして、指名されて、授業に出席していながら、準備不足で、発表できなかった学生が数名いたが、その原因は、資料探しに時間がかかったり、資料を読んで、まとめ、レポート作成に時間がかかったりで、発表の前段階、つまり準備段階での知識不足と経験不足があるためであった。その改善のために、何か方策を考えていかなければならないが、具体策を見つけ出すのは、今後の課題である。例えば、第2回目と第3回目の授業を変更して、講義ではなく、ワークショップ的な、具体的なやり方を訓練させるのも、1つの選択肢かもしれない。しかし、レトリックの基礎的な知識は必要不可欠であり、それを削除することは得策ではないと思われる。来年度に向けて、さらに考える必要がある。

そして、21名の内、14名が3回発表し、7名が2回発表した。約70%が目標の3回発表を実現でき

たこと、2回発表の中には、準備不足のための未発表ではなく、個人的な理由での欠席があったこと、前述のように、90分授業で7名の発表は時間的には多少困難であった可能性などを考えると、ほぼ成功したと評価できるであろう。

次に、発表された資料のタイトルだけを挙げておくことにする。なお、18名分を載せることにする。学生1名につき、3つのタイトルを続けて記入する。

- ①『コピー用紙の裏を使うな』、『大阪人はなぜ振り込め詐欺に引っかからないのか』、『心理学の先生が教える「読む」だけダイエット』
- ②『ミサイル防衛』、『さおだけ屋はなぜ潰れないのか』、『若者殺しの時代』
- ③『ユミリーの恋愛風水』、『なぜ占い師は信用されるのか?』、『わかる税金』
- ④『ガンに生かされて』、『お金がなくても平気なフランス人、お金があっても不安な日本人』、『女性の品格』

- ⑤『探偵ガリレオ』、『おしゃべりで世界が変わる』、『ゆっくり深呼吸をしてごらん。』
- ⑥『ホームレス中学生』、『魔法の心理テスト』、『女子アゲ↑』
- ⑦『世界がもし100人の村だったら』、『ギネス世界記録2008』、『14才の母』
- ⑧『夢が教えるあなたの現実と未来＝夢占い』、『よくわかる最新医学「うつ病」』、『明日も幸せに生きるための100の言葉』
- ⑨『星の王子様』、『佐伯チズメソッド肌の愛し方育て方—誰も言わなかったスキンケアの新提案50—』、『余命1ヶ月の花嫁』
- ⑩『きみと歩けば』、『黒のトリビア?』、『携帯で声の大きくなる男、デート中にメールを打つ女』
- ⑪『ベッカムに恋して』、『IKKO 女の法則』、『プチ哲学』
- ⑫『らき?すた』、『君が愛を

くれたから』、『もりのレストラン』

⑬『少女売買』、『モンスターマザー?』、『絶対幸せになれる話し方の秘密』

⑭『流星ワゴン』、『アウシュビッツの地獄に生きて』、『本当は恐ろしいグリム童話、シンデレラー母が遺した幸せへの約束』

⑮『冬物語』、『空中庭園』、『愛か?美貌か?ショッピングの女王』

⑯『日本人のしきたり』、『しあわせを引き寄せる10秒そうじ力』、『エルマーのぼうけん』

⑰『女性の品格』、『恋空』、『親の品格』

⑱『リア王』、『ももこの話』、『朝日新聞「患者を生きる」

前述の14名3回発表と7名2回発表で、合計56回の発表が行われた。上記の18名の学生の54タイトル中には、4名が計画段階で3つの資料を集めたが、実際には発表しなかった分、つまり4タイトルも含まれている。なお、計画書を

提出しなかった3名の学生（上記の18名以外の学生）は、皆2回しか発表しなかった。従って、上記の54タイトルから未発表分4タイトルを引いて、上記にない6タイトルを加えて、合計56タイトルになる。ともかく、これで発表に使用された資料の全貌がほぼ見える。

新聞記事1つを除いて、全て著書ということになる。ただ、著書と言っても、タイトルが示すように、小説、童話から、社会問題まで、更に実用書まで、実に内容的に幅広く、多岐にわたっており、予想以上に成功したと言える。成功と言ったのは、発表者がいろいろなテーマの資料を使用して、それに適した方法で発表することを経験したのであり、同様に、聴衆もいろいろなテーマの資料を使用した発表を聞き、評価・コメントすることで、発表の多様性を経験できたのであり、言い換えれば、多種多様なテーマの発表を経験することで、内容とは関係なく、あるいはどのような内容にも適用できるような、発表の技術の獲得の

重要性を直接的に実感できたのではないかと解釈できるからである。それに、勿論56回の発表という量的な多さも、発表技術の獲得には必要であり、56回という数字は、1セメスターという短い期間を考えれば、十分であったと言える。ただ、これで終了するのではなく、更に継続的な技術の獲得・発展が必要であるのは、確かである。訓練による技術の獲得は、継続こそ最大の効果を生み出すからである。

以上、日程と発表タイトルによる授業の検討をしてきたが、更に具体的に検討を続けていくことにする。

発表については、多くの学生は余り経験がなく、特に皆の前で、しかも少し高くなった教壇に上がって一人で発表するのは、非常にストレスになり、結局教員に提出したレポートと同一のものをただ読み上げることになってしまった。しかし、2回目、更に3回目と回数を増やしていくにつれて、雰囲気にも慣れてきて、発表が非常に上手になってきた。中には、

教壇の椅子に座らず、立ち上がって、聴衆の顔を見ながら、発表する学生、写真や絵を持ってきて、それを見せながら発表する学生、声の調子を上下させながら、内容に適した声で発表する学生、自分の経験を例に出しながら、分かりやすく発表する学生、身内の死を例に出しながら、涙を出し、聴衆も、教員も涙を出すような発表をする学生、社会悪に対して、声を上げて、怒りを出しながら発表する学生、弱者に救済を求めて、訴えかける学生、漫画を楽しく話す学生、実に個性的な、しかもテーマの内容に適合した発表をする学生たちであった。そして、聴衆である学生たちは、発表中は私語もなく、真剣に聞き、評価・コメント用紙に真面目に記入していた。勿論、発表が終了するたびに、周りと話したりしていた。この周りとの会話は、体験を共有するという意味で、必要なことであると考えている。ともかく、予想以上の成功で、満足している。ただ、その成功の理由が、単に今年度の新入生が良かっただけなのか、それ

とも授業運営が計画段階から実行段階にかけて上手く行われたのか、その以外のためなのか？ この分析は、今後継続的に行っていく必要がある。

成績評価については、教員が一方的に行うのではなく、学生からの評価と教員の評価をほぼ50%／50%にしたことで、授業運営が順調に行ったと思われる。それに、全発表の各ケースの教員評価と学生評価を比較・検討すると、ほとんどの場合、同様な傾向を示していたことがはっきりした。両者の評価が食い違うこともあるが、数的には少ないものであった。教員評価と学生評価の同様の傾向という結果は、各発表に対して、教員と同様の評価をしたことであり、つまり学生による理解・評価の程度が極めて高かったということによるものであったと言える。加えて、成績評価に学生自ら参加できること、しかも教員評価と50%／50%ということなどが、学生の授業への積極的な関わりを促進したと思われる。つまり、教員評価だけであれば、一方的な評価に対す

る不満も出るかもしれない、また学生評価だけであったら、公平性の欠落に対する不安が生まれるであろう。互いの協力の下で、授業だけでなく、成績評価も行われるという安心感が生まれていたのかもしれない。

最後に、演習「プロゼミⅡ」という訓練中心型・学生参加型の授業では、学生の積極的な関わりは、絶対に必要な前提と言えるもので、それなしには授業は成功しないのである。それだけに、どうしたら学生を授業に関わらせるかが重要になってくる。言い換えれば、教員からの学生の扱いが重要なのである。昨年度の同一の授業は、余り成功したとは言えないところがあったが、今年度の授業は、大成功と言えるほどのものであった。その理由の一部には、例えば、テーマの選択を完全に自由にしたこと、発表の仕方を完全に学生に任せたこと、成績評価に学生を参加させたこと、その他の学生への主体的な扱いがあったと言えよう。

今、授業が全て終わり、学生の

成績を考えている最中であるが、
楽しい雰囲気での授業が1セメス
ターを通してできたことを思い、

その理由を探し出して、次年度の
授業に役立てるようにしたいと思
っている。